

「先住民」をめぐって
ブルース・L・バートン
2000.09.06 放送

私はこの間、アメリカの親戚と会ったときに、去年の暮れにワシントンの国立自然博物館で面白い展覧会をみてきたという話を聞かせてもらいました。どんな展覧会かと言いますと、何と日本のアイヌ民族の歴史や文化をとりあげた大掛かりのもので、タイトルは、日本語に訳しますと「アイヌ～北方民族の心」というものだそうです。ちなみに、私が今手に持っている本はこの展覧会を記念して出版されたもので、ご覧のとおり、タイトルは表紙の上の方に書いてあります。

展覧会は、19世紀の末以来、北米各地の博物館に保管されてきたアイヌ民族の伝統手芸や生活用具を中心としたもので、日米両国のアイヌ専門家数十名の協力を得て実現されたものだそうです。昨年4月から始まり、来年、2001年の4月まで開催されているというので、ご覧になりたい方はまだまだ間に合います。ただし、いわゆる移動式の展覧会なので、現在の開催地については、ワシントンの国立自然博物館に問い合わせる必要があります。

さて、視聴者の皆さんのなかには、アイヌ文化をテーマにした展覧会をなぜわざわざアメリカで開くのか、と思う方がいるかもしれません。この疑問に対するもっとも単純な答えは、優れた芸術には国境がない、ということです。確かに、今回のアイヌ展は絶品が極めて多いので、どの国で開いても、入場者は喜ぶはずですが。

しかし、私はアメリカでの開催には、また別の意味があると思います。日本の皆さんからすれば意外かも知れませんが、欧米の人たちは昔からアイヌに対してかなり興味をもっています。理由は色々ありますが、アメリカに関して言えば、アイヌが先住民であるということが一番大きいと思います。ご存知のように、アメリカにもネイティブ・アメリカンという先住民がいるのですが、アメリカ人から見ると、アイヌはまさにネイティブ・アメリカンの日本版ということになり、その分だけ親しみやすい、というわけです。

さて、アイヌとネイティブ・アメリカンのどこが似ているのでしょうか。文化的な共通点もありますが、それより重要なのは、両者とも先住民として同じような歴史を歩んできたという点です。つまり、アイヌもネイティブ・アメリカンも、もともと自立した社会をなしていたのですが、それぞれ日本とアメリカ合衆国という、後から設立された国家により、土地を奪われ、伝統社会を破壊され、最終的には、近代国民国家のなかでの少数民族として組込まれ、辛うじてその姿を残した。そして現在もさまざまな差別をうけている、といった点です。

視聴者の皆さんは、ネイティブ・アメリカンの姿をいわゆる西部劇で見たことがあると思いますが、多くの西部劇では、ネイティブ・アメリカンは、白人より劣った人種、排除されるべき存在として描かれています。

しかし現在のアメリカではネイティブ・アメリカンに対するイメージは決してマイナスだけのものではありません。かれらに対する差別が完全になくなっているわけではありませんが、現在ではアメリカの国民はみな学校教育のなかでネイティブ・アメリカンの文化や社会について学び、偏見よりはむしろ尊重を覚えることが多いです。

また、大衆文化のなかにおいても、ネイティブ・アメリカンの立場を好意的に描いた映画や本が多く、これもかれらに対するイメージアップに一役買っていると思われます。代表的な作品としては、10年ほど前にヒットした、ケビン・コスナー主演の映画、「ダンス・ウィズ・ウルヴズ」というものがあります。ご覧になった方はお分かりのように、この映画はネイティブ・アメリカンのライフスタイルや文化に対して非常に好意的で、それを理解できなかった白人社会を痛烈に批判しているものです。

では本題に戻りますが、アメリカの人々はそういうわけで、ネイティブ・アメリカンと似たような歴史を歩んできた日本のアイヌのことを知ると、他人事とは思えず、興味を示すことが多いと思われます。では、肝心の本国日本においてはいかがでしょうか。残念ながら日本ではアイヌ文化にこうした関心をもつ方はまだ少ないのではないのでしょうか。

もちろん、一昔前に比べて状況はだいぶ改善されています。それを象徴するのは、1997年に成立した、いわゆる「アイヌ新法」です。正式名、「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」というものですが、名前のとおり、アイヌ文化の振興および、それに対する知識の普及を図った法律で、その最終目的は、アイヌの民族としての誇りが尊重される社会の実現を図り、日本国の多様な文化の発展に寄与するということです。

この目的が完全に果たされたとしても、元アイヌ領の土地に対する権利などさまざまな問題が残ると思われますが、それはさておき、ここで指摘したいのは、この法律が直接に課題としている問題も、それほど改善されていない、という点です。たとえば、アイヌに関する知識の普及に関して言えば、私は大学の日本史の授業でよく北海道の歴史やアイヌのことに触れますが、この問題に関する受講生の知識は限りなくゼロに近いと言わざるを得ません。

むしろ、これは学生自身のせいではなく、かれらが今まで受けてきた教育のせいだということでは明らかです。日本の中学校や高等学校で使われている日本史の教科書を見ると、アイヌやその祖先にあたるエゾやエミシと呼ばれた人々に関する記述がないわけではありませんが、量が少ないですし、内容も、和人との対立関係を描いた、日本中心的なものがほとんどです。また、アイヌのことは、現代社会を始めとする他の科目にも登場しますが、人権と差別との関係で登場するだけで、どんな教科書を見ても、アイヌが、日本とは違った独自の文化や社会をもった民族で、差別どころか、尊敬に値する人々である、ということ積極的に伝えるものはありません。これでは、アイヌの民族としての誇りが尊重され、相互に尊敬しあえる社会が実現されるはずはありません。

そもそも諸悪の根源は、教育の内容そのものというより、日本人は単一民族だという根

強い幻想ではないかと思います。10数年前に当時の中曽根首相が「日本人は単一民族国家だ」と発言して四方八方から批判を浴びましたが、心のなかでこのように考えている人はまだ多いのではないのでしょうか。確かに、日本の社会はアメリカなどと比べて相対的に均質的なものかもしれませんが、主流の日本人と違った民族性やアイデンティティをもつ人も大勢います。日本人は単一民族だという考え方は、かれらの存在や価値を否定するという過ちを犯す恐れがあります。

いずれにしても、世界的にも高い評価を得ているアイヌの人々の文化や伝統が、本国日本においてあまり知られていないのは、あまりにも悲しいと思います。アイヌの文化遺産は、本人たちはもちろんのこと、すべての日本人の誇りであるはずです。過去の過ちを取り消すことができませんが、今こそ、誤った単一民族論を徹底的に排除して、アイヌの問題を含め、日本版多文化主義を積極的に擁立する時代がきているのではないのでしょうか。

それでは。